

創立70周年記念事業

「全日本書道連盟70年を語る」

— 事務局長経験者による鼎談 —

登壇者 清水透石

全日本書道連盟 顧問 (元副理事長・事務局長)

事務局長在任期間 7年 1994(平成6)年～2001(平成13)年

田中節山

全日本書道連盟 顧問 (元副理事長・事務局長)

事務局長在任期間 4年 2011(平成23)年～2015(平成27)年

進行 辻元大雲

全日本書道連盟 副理事長・事務局長

事務局長在任中 2015(平成27)年～

真神 理事長を仰せつかっておりま

す真神魏堂です。本日は当連盟の

七十周年の記念事業として、事務局

長を務められたお二人と、それから

現事務局長の三人で鼎談をしていた

できます。先生方にはお忙しい中を

お越しいただきまして、ありがとうございます。

皆さんどうぞご清聴い

ただきたいと思えます。

辻元 本日は全日本書道連盟七十周

年の記念事業の一環として、「連盟

の七十年を語る」というタイトルで、

鼎談会という形で開催させていた

きます。書道連盟では書道関係、一

般教養的なもの、あるいは書写書道

教育の関係と、さまざま講演会を

行っておりますが、今回はかつて事

務局長を務められた方から清水透石

先生と田中節山先生においでいた

きまして、私も加わらせていただき

ますが、三者による鼎談ということ

です。連盟の少し前の方を調べてみ

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

田中 こんにちは。皆さまのお顔を

拝見しますと、私よりも経験のある

先生方が多いとお見受けしております。

少しでもお手伝いができればと思

っておりますので、どうぞよろし

くお願いいたします。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

たのですが、やはり先輩の先生が大

変苦勞して、そして現在に至ってい

ることを感じました。その点、先

方にお伝えできればと思っております。

願います。

です。

令和3年12月6日

於・上野精養軒 梅の間

2年ぶりに聴講者を集めての講演会を開催した。

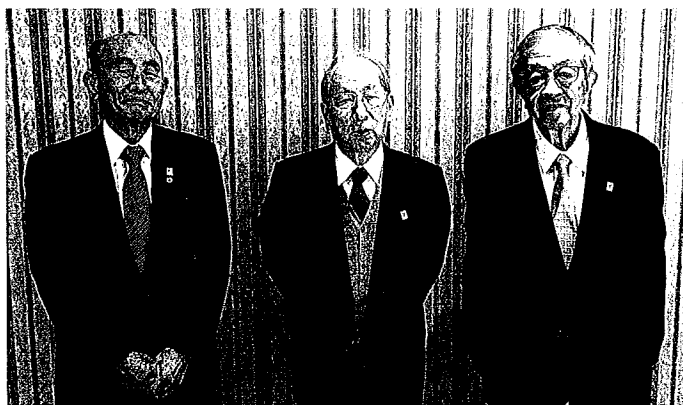
令和3年度書道講演会は創立70周年記念事業とし、連盟事務局長経験者による鼎談とした。鼎談の内容を、事務局の文責によりまとめ掲載する。

鼎談録の後には、当日配布した資料を添付する。

くお願いいたします。

辻元 それでは、鼎談を始めてまいります。

連盟の七十年は一九五二年、昭和二十六年、日本書道連盟からの通算で七十年となります。一九七三年、昭和四十八年に日本書道連盟から全日本書道連盟に改組しました。日本書道連盟の時代は吉田茂先生、豊道春海先生、中村梅吉先生が会長、理



事長です。そして全日本書道連盟に
なつてから中村梅吉先生、飯島春敬
先生以下と続きます。

事務局長は、初代のころは大津
民蔵、佐藤祐豪、田中凍雲各先生、
全日本書道連盟になつてからは田
中凍雲先生以下です。清水先生は
一九九三年の成瀬先生の時代です。
竹石古谿先生が事務局長任期中に
急逝されましたので、清水先生が平
成六年からバトンタッチされ事務
局長を引き継ぎました。田中先生は
二〇一一年、樽本樹郎先生、そして
星弘道先生の時代には相談役とい
うことでした。私は事務局次長も経
験しましたが、事務局長は田中先生
の後を受けてやっています。このよ
うな歴代の会長、理事長、事務局長
という形で来ています。

沿革として、日本書道連盟創立、
そして日本書道連盟から全日本書道
連盟に移っていくのをダイジェスト
でまとめております。創立のころに
ついて、清水先生に触れていただき
たいと思います。

清水 連盟四十年史を製作したとき
の挨拶で、青山杉雨先生が書かれた
文を紹介して入りたいと思います。

「書道連盟は戦後の書道教育がアメ
リカの進駐軍の教育方針で廃止され
たとき、これを復活する運動を推進
するために豊道春海先生の主張で創
立された」と。まずこのようにうたっ
て、「その後、豊道先生は連盟を主
体として困難な仕事に取り組み、終
戦直後の乏しい生活の大部分をこの
ために尽くした。そしてGHQや文
部省を睨みさえあれば訪れて、教科書、
書道科復活の陳情を続けられた」と
いうようなことが書かれています。
豊道先生は昭和二十一年から二十六
年までの活躍の中で、一人では駄目
だ、組織を作つて方々へと運動を進
めていったと書かれております。

豊道先生という先生は、皆さんも
いろいろな書面ではご存知かと思ひ
ますが、僕も会つたことはありません
んが、四十歳ごろ、大正十五年に東
京に新しい美術館を建てたとき、書
道を何とか入れてくれという陳情を
東京府に行つたらしいです。けれど

も、それがなかなかまかつたので、
美術館を建てた佐藤慶太郎先生に直
談判をして、大正十五年に入れても
らつた。そして、書道作振会といふ
ものから続いて、今の謙慎書道会な
どが一番先に都の美術館に入つて展
覧会をやつたといふような記録があ
ります。豊道先生がいかに苦勞され
たかということ、またその下で青山
先生、上條先生、その他書道の面々
が本当に苦勞され、厳しい中で進め
られたといふ話を聞いております。

辻元 その辺りについて、田中先生
は上條先生からいろいろお聞きに
なつておられますか。

田中 戦後、アメリカ軍から書道教
育をやめるようにといふ強い話が
あつて、ヤイデーといふアメリカ
から教育視察団の女性の団長さんが
来て、都内の某小学校を視察されま
した。上條先生もご一緒だったそう
です。よく私に話をしてくれたのは、
学校に視察が来るといふことで、書
道の先生は前もつて子どもたちと手

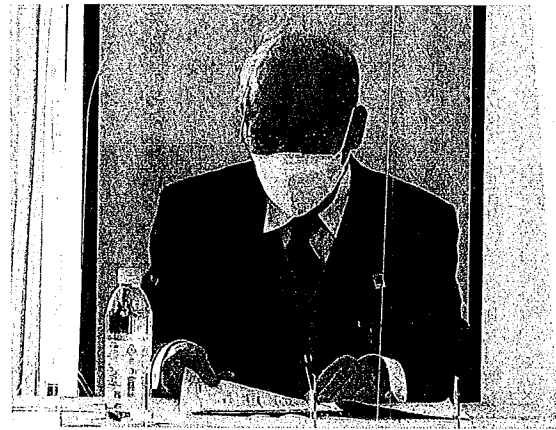
習をしてしまった。「これから基本点画の勉強をするぞ」「はい」「横の画、筆を皆さん持って。正しく持っていますか。始めますよ。とん、すー、とん」。皆、無言です。一斉に先生の言葉に合わせて筆を動かす。全く無言。「はい、よくてきました。次は縦の基本勉強ですよ。筆を持って。ちょっと筆の先に墨をつけて。始めますよ。とん、すー、とん」。これを一時間やってしまったのです。するとヤイディー女史から、これこそ日本の一億一心固まって戦時に向かった姿勢がある、このように読み取られたのだと。前もって授業をやってしまったから、これは仕方ないのしょうけれどもね。それで、「小学生には筆による勉強は必要ない。芸能方面の中に何か取り入れられたら、それならいいでしょう」というようなお話でしたが、結果的には小学校に入りませんでした。そのような話を上條先生から時折耳にしたことがあります。

辻元 日本書道連盟の結成大会が

一九五一年四月一日に有楽町で開かれましたが、そのときの大会宣言があります。「本連盟は全日本書道界の総意を結集してこれを代表し、書道教育の振興と書道芸術の高揚のために最善を尽くし、かつ各書道団体の存立を強固にし、もって日本文化の発展に寄与することを期する」という高らかな宣言をした上で日本書道連盟が創立し、そして一九五三年に社団法人になるわけです。

それから全日本書道連盟に改組するわけですが、一九七二年の日中国交正常化に伴い、日本からの書道代表団は一本化された書壇を代表するものであることが望ましいということで、日本書道連盟がその他の幾つかの団体と協力して全日本書道連盟と改組するわけです。これが一九七三年七月二十五日です。

清水 先生方がやはり活動をばらばらにやっていたということがあって、とにかく小学校に入れてもらうためには方々に接触をしなければいけないということで書道連盟を作り



清水透石先生

ました。有楽町の毎日新聞社で二百名の出席を得て結成大会を開き、しばらく会長は保留としていましたが、二十六年の八月に当時の首相である吉田茂総理大臣を会長にいたって、本格的に活動していったという事です。

こういうものを作るのにも、文部省や内閣などと交渉するときにはなかなか返事が来ないことがあるので、相当苦労してここまでこぎ着けたのだらうと思います。特にこのときは大切なこととして、書道教育の

振興ということを、小学校の中に書道、その当時は習字と言っていたと思います。とにかく独立したものが欲しいということで活動したわけです。

田中 上條信山先生は書教育のことを専門にお考えになって、文部省の委員になられたりしましたが、全日本書写書道教育研究会という、先生方の学校の会の理事長を務めておられました。日本書道連盟の創立のときからの書写書道教育振興は、上條先生が一番注視をされたことです。

辻元 「書写・書道教育、書道振興のための取り組み」ということで、教員免許法講習会の辺りから始まったさまざまな講習会、夏期書道講習会、夏期書道大学講座というように変化していくわけですが、書写書道教育、書道振興の推進運動が連盟の大きな柱です。清水先生、その辺りを加えていただけませんか。

清水 書道講習会を開く目的、ある

いはきつかけですが、昭和二十六年に毛筆の習字が小学校の四年生から何とか入る状態になったけれども、このときの文書を読んでみると随分ひどいことが書いてあります。」も

し毛筆習字を児童がこれが必要とし、同時に学校がこれが必要と認めらるならば、四年以上の適宜の学年にこれを指導することがよいであろう。適宜といふことで学校選択、やってもよいし、やらなくてもよいというようなことでした。結局、先生方がやろうとしなければ盛り上がりがないだろうということで、書道講習会の実施を考えなければなりません。

その最初は、小学校や中学校で書道の免許を持たない人にも、とにかく書道の免許を持ってもらおうというところで、教員免許法講習を東京家政大で三回までやったというのですが、当時の書道界超一流の先生方が指導に当たっておられました。技術講習だけではなく、免許というところで相当力を入れて、実質授業ができるような形態を作ろうとしたようです。

辻元 田中先生、書写書道教育のことについて触れていただけませんか。書写書道教育の推進を連盟が行ってきていること。

田中 私の経験から話しますと、一九四五年、小学校一年生のとき終戦になりました。夏までは毛筆の授業があったのですが、二学期、夏休み後はもう習字をやりません。授業が撤廃になりました。私が六年生の頃から学校選択で始めたようですが、長野県の何せ山の中ですから、ありませんでした。中学校も学校選択はありませんでしたし、高校に行ってもよく書道が選択できる状況でした。実際に書写書道教育の方は、上條信山先生が全書研の中であちこち行ったり、ある時期は夏休みに各地で地方研修を行ったりしました。先生方に大勢集まっていたいて、夏休み研修会が続いたようでした。

辻元 ありがとうございます。清水先生。

清水 東京家政大学に要請した文がありますので、読んでみます。「書道教育振興のために、小・中・高等学校の現職教員に、書道科教員としての実力を養成することが特に緊急を要する課題であるとの認識に基づいて、連盟では発足直後の昭和二十六年七月二十五日から八月十二日まで、東京家政大学、青木誠四郎学長のところに要請して教員免許認定講習会を同大学で行った」と書かれています。相当長い期間これをつけて、そして免許証を与えていたということなんです。

辻元 書写書道教育を学校教育に定着させるために先人が苦勞されて、昭和二十六年から毛筆習字が復活したのですが、四年生以上で適宜、学校選択という形でした。これは一九六八年、昭和四十三年に小学校三年に毛筆を年間二十時間必修とするまで、その状態が続いたわけなんです。その間、連盟は全書研などと協力しながら、書写書道教育の学校への定着を運動する。専科としての習

字科を狙ったこともありましたが、国語科の中の書く領域の書写ということまで定着させる。免許認定講習会は一九五一年、昭和二十六年から一九五八年、昭和三十三年まで続きました。

その後、夏期書道講習会、後に夏期書道大学講座となって現在にながっていくのですが、会場は大学の校舎を借りたりしました。その夏期大学等を含めて会場探しは非常に苦勞して、現在は池袋に定着して夏期書道大学を開いておりますが、清水先生、苦勞されたことはありませんか。

清水 当初は学校を借りたりしていました。例えば練馬の富士見台にある女子高校では長くやっていました。その後全国を回ったところから古筆をお借りして、あるいは古典を実際に持って、北から南まで全国を回って講習もやりました。最近では東京だけですが、その当時はやはり地方まで一生懸命出向いて講習を行ったと

記録されています。

特に小学校への書の専科を願って活動し、そして昭和二十六年に曲がりなりにも入った。そこで今度は書道教員の充実を図ろうと講習をやった。その後、書道連盟のもう一つの柱である、書の専門家を養うために書道の講習会も、大学講座と名前を変えて進めてきたのだろうと思います。

辻元 一九七一年以降、毛筆習字教育の充実、指導者育成のために書道教育講習会が各地で開かれました。これは主に教員を対象にした講習会で、連盟の役員が指導に当たっております。

書道文化功労者表彰等も行われています。これは創立十五周年を契機に、隔年置きぐらいに、六十一の個人、団体に贈るといったような功労者表彰が過去にありました。

そして書道講演会と古文物の展覧、これは先ほど清水先生がお触れになりましたが、全国各地でいろいろな書道講演会等で古文物の展覧、

それを基にした鼎談会等も行われております。

次の話題に移りますが、海外との書道文化交流です。日本と中国との関係を中心とした交流が多いのですが、清水先生も田中先生も現場にいろいろ携わっておられますので、よろしくお願いいたします。清水先生から。

清水 昭和三十二年に片山哲元総理が日中文化交流協会の会長として、中国との書道の交流をということとを言われました。そのとき、豊道春海先生は非常に慎重だったらしいです。当時は中国のことを新中国と言っていました。台湾とは正式な交流があったので、書道連盟としては新中国と交流することを躊躇しました。ではどうしたかというところ、書道連盟の中の人たちだけが、日本書道文化連合会という別の会を作って中国との交流をしようということになったのです。

辻元 田中先生、この海外交流、日中文化交流で先生がお感じになられているところをお話しいただけますか。

田中 私が初めて中国の学校の授業の見学したのは昭和三十七年くらいでしょうか。上海の小学校の教室に行きまして、生徒が三十人程度、視察の私たちが三十人くらい入りました。やはり日本の最初の教育と同じように一斉教育でした。顔真卿の基本練習をやっております。黒板に先生が範書する動きを見ながら、子どもたちも一緒に習う。日本と同じように感じました。

中国には少年宮という子供の研究団体がありますが、そこへも行きました。やはり顔真卿をやっているのです。顔真卿が子供たちの心を雄大にして強くなる書だと説明してくれました。

今から三年ほど前、小学生の教室を見学する機会がありました。やはり顔真卿なのです。小学校では何よりも顔真卿というような考えがあ

るようです。そのような体験を中国へ行ってしてきました。

辻元 ありがとうございます。

一九五五年、中国人民対外文化協会との申し合わせで、翌年日中文化交流協会が発足します。そして、日中文化交流協会と日本書道連盟と中国人民対外文化協会との間で交流が計画され、五七年、日中相互に交換展示する民間交流が行われました。一九七二年の日中国交正常化まで、不便な中で交流が行われた歴史があるわけです。

一九五七年以降、対中国書道文化交流事業の一切を移譲する機関として日本書道文化連合会が発生され、日本書道連盟がまた別にある。一九五八年に日本書道代表団、豊道春海団長が一カ月をわたって中国を訪れて、文化的な交流を行う。その後、全日本書道連盟に改組するまで、つまり日中国交正常化まで日中交換書道展等が開かれる。日本書道代表団が何回か訪中し、中国からも来日しました。

清水 昭和三十六年には西川寧先生を始めとして、四月二十七日から五月三十日まで三十四日間、中国を回ったという記録が残っています。相当長い期間です。

翌三十七年には第三次訪中書道代表团として五名、山田正平先生が団長となって香川峰雲、佐藤祐豪、殿村藍田、今井凌雪と、これらの先生が訪中されました。山田正平先生は途中で具合が悪くなって早く帰られたものの、後に亡くなられたと記録があります。船で出かけたたり、長期間だったり、困難な旅もしたようです。

辻元 ありがとうございます。

山田正平先生が亡くなられた年、私は東京学芸大学の一年生でした。入学したてのときに山田先生の授業を、先輩に引っ張られて教室の外からのぞき見していたことがあります。山田先生の四年生対象の授業で、独特の板書をされる様子を見ておけると、先輩に無理やり引っ張っていかれました。先生はどてらのようなも

のを着ていましたね。その年に訪中されて、北京で具合が悪くなって、秋には今お話のとおりで。授業を拝見できたことが強く印象に残っています。

清水 昭和四十八年、理事長の中村梅吉先生が衆議院の議員会館の公邸に青山杉雨、飯島春敬、金子鷗亭、香川峰雲、村上三島の五氏を招き、書道界が一本にまとまるように提案されました。

辻元 六月の総会で書壇統合に関する決議文を採択、そして七月二十五日に日本書道連盟臨時総会を開き、全日本書道連盟に改組されます。

前年の一九七二年に日中の国交が正常化されたことが機運となり、日本書壇の一本化が求められたわけです。

その改組後、一九八一年に中国書法家協会が創立します。今年、書道連盟は七十周年ですが、中国書法家協会は四十周年です。中国書法家協会が創立するいきさつがあります。

清水先生からお願いできますか。

清水 中国書法家協会発足のときに書道連盟の当時の会報に載っていたので読んでみました。中心となる舒同先生は中国人民解放軍のトップ、古参でした。革命に参加して八路軍で戦ったというように、そして山東省の第一書記、その上書道でも名が売っていたということです。

一九八一年四月二十七日、全日本書道連盟理事長の飯島春敬先生から中国書法家協会創立記念大会へメッセージを送っています。「大変喜ばしいことだ、これから一生懸命日本の方も援助するから頑張ってくれ」という内容のメッセージです。

そのことについて、これはずっと後の二〇〇〇年十一月、書道連盟が五十周年記念、そして中国書法家協会が二十周年記念のとき、中国書法家協会の主席代行であった沈鵬先生がこのように書いておられます。「中国書法家協会初代主席・舒同先生と、全日本書道連盟元理事長・飯島春敬

先生が友好的な関係を築き上げたことが、中国書法家協会の発足に非常に大きな役割を果たしました。中国書法家協会の創立直後、全日本書道連盟から多大な援助をいただきました。これは私どもにとって今でも忘れることはできません。このことは中国書法家協会として未永く忘れずにおく」といった内容です。飯島先生個人でも書道連盟としても、中国書法家協会創立以後、物心両面で支援しました。

その後、中国書道研究会を編成してたびたび訪中しました。滞在中、講習の場をセッティングしてもらい、団員数分、一人二万円を研修費として中国書法家協会に渡しおりました。

辻元 中国書道研究会という形で第十七回まで行いました。清水先生には何回か引率いただきました。今では考えられませんが、当時の中国はまだ経済、体制が大変でした。日本の書壇が精神的な意味でも、経済的な物質的な面でも支援をして、書法



田中節山先生

には、中国の先生方が日本へおいでになったときの交流等は結構、接待などがありましたでしょう。

田中 そうですね。大きな宴会場で、向こうからも結構大勢来るようになりましたから、よく同行いたしました。中国側の希望によって関西へ団をお連れし、関西の先生方と交流をしていたこともありました。

辻元 ありがとうございます。

全日本書道連盟の対外交流は、特に中国との関係が多いのですが、最近の政治情勢、またコロナの関係で交流が途絶えています。最近は二年くらい前になりますが、私が北京と瀋陽へ、中国書法家協会に表敬訪問に行ったのが最後になってしまっております。

田中 中国には何回も多く行っていいのですが、私はその頃、書道連盟を通じて訪中することはありませんでした。

辻元 でも、先生は事務局長の時代

がありましたらお願いします。

清水 では、二、三申し上げたいと思います。一九九六年に来日された王学仲先生。先生は筑波、当時は教育大でしょうか、にもおられたし、今、上野駅の新幹線に乗るところに大きなタイルの絵、その先生が描いたものがありますが、日本のことに大変詳しい、方々のことを私たちがよくよく知っていて、案内をするこちらの方が何となく申し訳なかったです。

その次に来日された李鐸先生は軍人でした。この先生に僕が感心したのは、団員の人たちと毎夜、勉強会をやるのです。今日見たこと、今日の作品についてなど彼らと話し合いをして。確か四日間くらい一緒に過ごしましたが、非常にきりりとしておられました。孫子の兵法を中心に勉強されている。

その先生に僕は勝手なことを申し上げたのですが、日本では先生方が来日した際、中国大使館の人を呼んだり、全国から書道連盟の主立った

先生に集まってもらったりして懇親会を開いている。私は何回か中国へ行ったけれども、ひどいときは空港で「今日懇親会があるけど来てくれるか」などと呼び出しているわけですね。日本とあまりに対応が違うのではないかと申しました。

李鐸先生が「次に来たときには全部集めるから」とおっしゃってくださって。実際次に訪中した際には、本当中書協始まって以来初めて副主席が全員集まった。

李鐸先生は本当に思い出深い先生ですが、後年新井先生と一緒に訪中したときも、李鐸先生はもう年老いていましたが、軍服で、一人お付きを連れて北京まで来てくださいました。このような素晴らしい先生もおられるのだなと私自身、認識を新たにすることがありました。

辻元 代表団は数名で団を組んで互に訪問交流を行っております。

田中先生は上條先生と日中教育者協会のもので百何名や二百名近くで行ったことがありますね。教育の先

中国書法家協会と主に代表団を派遣し合うなど、定期的に書道交流を行ってきました。その中に清水先生が関係された団、田中先生が関係した団、それから私が関係した団もあります。清水先生、思い出に残る団

生方を中心として、上條先生、種谷先生中心で。先生、それには何回か行っていらっしゃるのですか。

田中 ええ。そちらと、上條先生お一人の大きな活動もありまして、随分行きました。

辻元先生、瀋陽へ行かれましたね。あそこには萬歲通天進帖がある。ちょっとお話しいただけますか。

辻元 私が、これが現時点では連盟と中国との最後の交流になってしまっているのですが、北京の中国書法家協会を表敬訪問しました。書道連盟七十周年、中書協四十周年の記念事業を行います。うと確認しながら、実現しませんでした。

要人とお会いした後、瀋陽の方へ行きました。改装された遼寧省博物館をご案内いただきました。萬歲通天進帖を、これは通常展示はされていませんでしたが、別室で、直に見せてくれました。他に名筆を四、五本、みんな肉筆を見せてもらいました。

清水先生も萬歲通天進帖をご覧になっているのではありませんか。

清水 見えています。新井光風先生が団長で行ったときです。

萬歲通天進帖が鑑賞できるようになった背景には裏話があります。

ある中書協代表団に随行したのですが、翌日に帰国を控えた前夜、赤坂のホテルに泊まったのです。もう夜はホテルから外出しないでくれとお願いして僕は帰宅しました。翌朝ホテルに行くと、皆が大騒ぎをしているのです。念を押したにもかかわらず夜外出してパスポートを取られたらしい。日本に留め置くわけにはいかないということで、中国大使館に掛けあって何とか帰すことができました。その団員がたまたま遼寧省の主席だったのです。「今度遼寧省へ来たときには必ず萬歲通天進帖をよく見せるから」という言葉を受けて、その後新井先生と一緒に訪問しました。

そのときに、新井先生が来たというので、楊仁凱先生や前の遼寧省

博物館の館長も来られたけれども、当の本人は来られず、「四川省へ出張しているから行かれないが、何時間見てもいい」とと伝言を残していた。それで、本当にじっくり見せていただきます。焼けたような、触れば壊れてしまうというくらいのごろろを見させていただいて、これは眼福を得たと思いました。

辻元 田中先生。三希堂法帖にまつわる話を少しお願いします。

田中 二〇一三年、書道連盟が中国から、大変なご褒美をいただきました。中国文化交流貢献賞。中国との文化交流に貢献した外国の団体・個人に贈られるもので、代表して表彰式に出席しました。中国大劇院で劉延東国家副総裁から表彰を受けました。その後、故宮を案内いただけるということで、国家的な車に乗せていただいて、故宮の中で車で入っていきました。そして三希堂という、乾隆皇帝が建てた立派な建物の中で三希堂法帖、三希堂帖という三つを

ゆっくりと見せていただくことができました。王羲之の書と伝えられる「快雪時晴帖」、王珣の「伯遠帖」、それから王献之の書いた「中秋帖」、この三つが三希堂の中にあります。故宮にお出かけになられる折は、ぜひ三希堂に行つて、この三希堂法帖をご覧になっていただくと、ものすごくいいかと思えます。黙っていると、故宮の中をずっと歩くばかりで行つてくれないのです、なので、ちょっとご紹介しておきたいと思えます。

辻元 ありがとうございます。書道講演会。これは、連盟として書道講演会を今は年二回行っています。書写書道教育をテーマとした講演会と、一般的な教養的なことも含めた講演会と二回。過去の連盟の講演会の歴史を見ると、かなり幅広くやることがお分かりになると思えます。講演会について清水先生、何かありますか。

清水 書写書道教育の方については、ここにおられる先生方が随分ご

協力くださって、現役の先生方を呼んで、書道連盟の二つの仕事である学校教育の充実と、今の状況をわれわれも知ることができたという点では大変よかったですと思います。

清水 それともう一つ、話はずれですが、書道連盟として会館を造りたいという要望が大変早い時期からあったのです。豊道先生は自身のお金を基金とし、国として書道会館を造ってもらいたいと。そういう働きかけをしました。結局かなわなかった。

次に飯島春敬先生が、基金を積み立てて、何とか今度は書道連盟としての会館を、国でなくて連盟として造ろうとしましたが、連盟が経済的に苦しくなってきたかなわなかった。

近年では井茂理事長、星事務局長のころ、今はビルを借りているから、どこかワンフロアでもよいから買いたいということであったけれども、結局買う時期ではないとの意見があったて挫折しました。

書道連盟が本当にこれから活躍していくためには、やはり連盟の事務所を借家でなく造れるようになればいいなど、私は副理事長を辞めるときにつくづく思ったということだけを言っておきます。

辻元 ありがとうございます。

夏期書道大学講座は先ほどの歴史でも触れましたが、毎年行っています。清水先生、田中先生、私もですが、講師も担当しました。

田中先生、夏期書道大学講座についてお考え、感想をお願いします。

田中 現在の夏期書道大学講座は、学校関係の方ばかりでなくて、一般の方、それから書道塾を開いておられる方、いろいろな方が参加される。大学という名前がついておられてもね。皆さん非常に熱心で、毎年お顔を拝見する方は、最前列の真ん中の席を取るために毎朝早く来て並ぶのだそうです。毎年顔をそろえているのか、隣同士でお話ができるようになったなど、非常によい面を講座の

中で拝見しております。

辻元 清水先生は夏期書道大学講座、事務局長として進行されたことも多く、講師もされています。

清水 会場が東京だけでは集まれる人に限りがある、地方の方はホテルを取らなければならないということもあるの、早めに宣伝でもして、今年はどこでやりますということでもう少し広げてはいかかかと思

います。ただし、それにはやはり資金がまた必要ですので、連盟会員を何とか増やさなければいけないだろうと思うのです。

私が事務局をやっているとき、理事長だった尾崎巨鵬先生も梅原清山先生も、会員を増やすことに随分腐心してくださいました。やはり今もまた減ってきているのではないかとひそかに心配しています。先生方は今日、集まったことを一つの機会として、お互い会員を増やすように協力していただきたいと思います。

辻元 ありがとうございます。今の状況では集まってこのような勉強会はなかなかしづらいのですが、連盟としてはこのような書道普及活動は最も重要な事業ですので、東京だけでなく地方への波及も含めて今後考えていかなければならないかと思っています。

時間がなくなりました。項目だけ言いますが、書写・書道教育推進協議会の協力。これは今、全国書美術振興会、日本書芸院等と協力、それから全書研、全高書研等と協力してやっています。

それから日本書道ユネスコ登録推進協議会。これは、書道が登録無形文化財に登録され、今後さらにユネスコへの登録運動が進むことになるかと思っています。

また助けあい募金、これは書道連盟として一九五六年、昭和三十一年から、書道界で初めての試みとなる歳末社会奉仕の作品頒布会、作品を頒布するということでも実施しました。そのいきさつを清水先生からお願います。

清水 当初は連盟役員の手切マクリ作品を、後に色紙作品を頒布していただきました。その時々で収益金の寄託先を指定しました。先生に作品を書いていただくのが大変だということで、梅原先生のように、連盟役員に金額を割り当てるようになりました。

今は日赤を通じて相当額を寄付していると思います。長い歴史がありますので、ぜひ続けていっていただきたいと思います。

辻元 ありがとうございます。

今日はお二人の先生と私とお話しさせていただきましたが、連盟の七十年の歴史を語る時、まだまだいろいろなことが出てきます。また、これからのことを考えるときさまざまなことがあります。終わりにになりましたが、最後に両先生から一言ずつ、今日の鼎談のまとめをお願いします。

田中 今日は大変古い話から、連盟の創設というよりも、連盟的な動き

の始まった豊道先生の辺り。これはやはり戦後の書写書道教育の復活につながるための大きな運動でなかったかと今、考えております。そして、やがて連盟が全日本書道連盟になって、いろいろな活動を開始した。これが大きな動きになって今日まで続いて、さらに今後、新しく何か取り入れていくようなことがあれば、また皆さんからご意見を頂戴して連盟がさらに発展できればというように感じております。今日は本当にいろいろなベテランの先生方がおられますので、どうぞ今日のごことに関して連盟の方にご意見をお寄せいただくのもよろしいかと思っております。どうもありがとうございます。

清水 やはり豊道先生がいかに努力されたかということ、この鼎談の前に思いついたわけです。都美館に書道が入ることも、日展に書が加わることも、豊道先生が強力に運動を進めてくださったからです。

そして書道連盟のためには、九十二歳で亡くなっているけれど

も、九十歳過ぎまで働いてくださった。その後も多くの先輩の先生方が連盟のために、あるいは連盟を通して日本の書道、学校教育としての書道は何とか充実させたいという思いが連盟の中に詰まっていると思うのです。それはこの連盟の四十年史、五十年史、そして今度のこの七十年史の中によくまとまっていますので、先生方、機会があれば、ぜひそれを聞いて確認いただければありがたいと思います。今日は本当に、変な話までしまして申し訳なかったの

ですが、ご勘弁ください。ありがとうございました。

辻元 どうもありがとうございます。

時間が来ましたので、これで終わりにさせていただきます。このように七十年の間に多彩な活動を行ってきたことが分かります。では、現在はどうなのかということをもう一回見直して、これからの連盟の活動について、そして将来どのように託していくか、次の世代へバトンタッチしていくのか考える必要があります。

この七十年を一つの節目として来し方を振り返り、また来るべき未来へ向けて連盟として活動を持っていきたい、そのような決意を持っています。本日はどうもありがとうございます。



辻元大雲先生

歴代会長・理事長 / 事務局長

日本書道連盟 時代 1951(S26)年4月1日～				
1951(S26)～ 1967(S42)	会 長 理 事 長	吉 田 茂 豊 道 春 海	事務局長	松田 武夫 大津 民蔵(S26.8～) 佐藤 祐豪(S38～) 田中 凍雲(S40～)
1967(S42)～ 1973(S48)	理 事 長	中 村 梅 吉	事務局長	田 中 凍 雲
全日本書道連盟 改組後 1973(S48)年7月25日～				
1973(S48)～ 1975(S50)	理 事 長	中 村 梅 吉	事務局長	田 中 凍 雲
1975(S50)～ 1987(S62)	名誉会長 理 事 長	中 村 梅 吉 飯 島 春 敬	事務局長 事務局次長	田 中 凍 雲 飯 島 太 久 磨(～S58)
1987(S62)～ 1989(H 1)	理事長代行	淺 見 寛 洞	事務局長	田 中 凍 雲
1989(H 1)～ 1993(H 5)	理 事 長	田 中 凍 雲	事務局長	長 揚 石
1993(H 5)～ 1997(H 9)	理 事 長	成 瀬 映 山	事務局長 事務局長 事務局次長	竹 石 古 谿 清 水 透 石(H6.10.～) 百 瀬 大 蕪(H6.10.～)
1997(H 9)～ 2001(H13)	理 事 長	尾 崎 邑 鵬	事務局長 事務局次長	清 水 透 石 百 瀬 大 蕪
2001(H13)～ 2005(H17)	理 事 長	梅 原 清 山	事務局長 事務局次長	石 飛 博 光 百 瀬 大 蕪
2005(H17)～ 2009(H21)	理 事 長	新 井 光 風	事務局長 事務局次長	星 弘 道 辻 元 大 雲
2009(H21)～ 2011(H23)	理 事 長	井 茂 圭 洞	事務局長 事務局次長	星 弘 道 日 賀 野 琢
2011(H23)～ 2015(H27)	理 事 長	樽 本 樹 邨	事務局長 事務局次長	田 中 節 山 日 賀 野 琢
2015(H27)～ 2021(R 3)	理 事 長	星 弘 道	事務局相談役 事務局長	田 中 節 山 辻 元 大 雲
2021(R 3)～	理 事 長	真 神 巍 堂	事務局長	辻 元 大 雲

沿革

【1951(S26)年4月1日 日本書道連盟創立 創立前後の経緯】

1947(S22)年	3月	豊道春海氏を委員長とした「日本書道教育振興協議会」結成。 小学校毛筆習字の復活を衆参両院へ請願するなど猛運動を展開するも、 連合軍総司令部や文部省の了解を得られず。
1949(S24)年	9月	当時の文部政務次官で書道に理解のあった水谷昇氏らの参加を得て 「全書作家連盟」結成。豊道氏を委員長としてさらに運動を継続。
	10月	第1回の教育課程審議会開催。書道界から上條信山氏が参加。 小学校での毛筆習字教育再開への足掛かりをつかむ。
1950(S25)年	10/28	文部省「小学校4年以上に毛筆習字を適宜課することができる」 学校選択という形で毛筆習字の採用を容認。1951(S26)年4月から実施。
	11/26	全書作家連盟と全日本書道教育振興協議会、合同懇親会を開催。 両団体は解散し、書道界、書道教育界の対外交渉団体として全書壇が 大同団結した新団体を結成しようという機運に。 新団体結成準備委員会選考世話人7名(有光次郎、水谷昇、尾上柴舟、 豊道春海、高塚竹堂、鈴木翠軒、石橋犀水)選出。 豊道氏を創立委員長に、他6氏を相談役とした。
<p>〈創立準備委員会の顔ぶれ 26氏〉</p> <p>全書作家連盟(上田桑鳩、田中金峯、青山祖燕) 全日本書道教育振興協議会(桑原江南、藤田讀陽、 金子鷗亭) 日本書道美術院(飯島春敬) 書道芸術院(伊藤神谷) 書道同文会(田邊古村) 書作院(手島右卿) 新日本書道院(内山雨海) 謙慎書道会(江川碧潭) 雅友会(田中真洲) 書道教育協会(熊田伝一郎、金田心象) 書壇院(佐藤祐豪) 全国小・中・高校連盟(上條信山) 都研究会(田中海庵) 篆刻(石井雙石、中村蘭台) 女流(花輪たね、鷹見芝香) 愛好者(松田 武夫、富山民蔵、斎藤虎起智ほか1名)</p>		
1951(S26)年	4/1	「日本書道連盟」結成大会。有楽町の毎日新聞社講堂に200余名出席。 会 長 しばらく保留 副会長 文部政務次官水谷昇、日本芸術院会員尾上柴舟、同豊道春海 理事長 豊道春海
<p>〈大会宣言〉</p> <p>本連盟は全日本書道界の総意を結集してこれを代表し、書道教育の振興と書道芸術の高揚のために 最善を尽くし、かつ各書道団体の存立を強固にし、もって日本文化の発展に寄与することを期する。</p> <p>〈日本書道連盟綱領〉</p> <p>一、本連盟は、全書壇、書道教育界ならびに書道愛好者の総意に基づいて、各界との交渉団体と して書道の振興を図り、日本文化の発展に寄与することを期する。</p> <p>二、本連盟は、国民の総意に基づいて、教育書道の振興を図り、その達成を期する。</p> <p>三、本連盟は、書道芸術の高揚を図り、その普及、徹底を期する。</p>		
1951(S26)年	8/24	総理大臣官邸大会議室で吉田茂会長の推戴式、連盟臨時総会、全国書道 教育者大会を開催。全国から351名が出席。
1953(S28)年	10/16	文部省(当時)認可により「社団法人 日本書道連盟」となる。

書写・書道教育、書道振興のための取り組み（過去に行われていた事業）

○書道講習会

<p>教員免許法講習会（のちに夏期書道講習会） 1951(S26)年～1958(S33)年</p> <p>小・中・高校の書道科教員の実力養成が喫緊の課題との認識から、東京家政大学協力のもと開催。第3回までは東京家政大学、第4回からは大東文化大学との共催で継続した。</p>
<p>夏期書道講習会（のちに夏期書道大学講座） 1959(S34)年～1965(S40)年</p> <p>教職単位取得にとらわれず、純粋な実力の向上を目的とした講習会を書道界の最高権威者によって開催することとし、中央大学と共催した。</p>
<p>夏期書道大学講座 1966(S41)年～1973(S48)年</p> <p>「夏期書道大学講座」に名称を改め、専門コースと普通コースを設けるなど内容充実を図った。S44年から神田一ツ橋の共立女子学園で、45年からは練馬区の富士見女子高校で開催された。</p>

○公認書道師範認定制度 1957(S32)年～1973(S48)年

普通師範もしくは専門師範の資格を連盟として公認する師範認定制度実施。
43回の認定を行い814名の認定合格者が誕生、書塾その他で書道教育に従事するなど活動した。

○書写書道教育充実のための大会や研修会

<p>全国書道教育大会 1955(S30)～1971(S46)年</p> <p>各県の書道連盟や教育委員会と共催で、和歌山、東京、千葉、鳥取で全国大会を開催した。</p>
<p>書写書道教育研修会 1973(S48)年～1993(H5)年</p> <p>教職員を主な対象とした研修会を、全国で計15回開催した。</p>

○書道文化功労者表彰 1965(S40)年～1988(S63)年

創立15周年を機に定期総会の席上、書道文化功労者の表彰を行った。
昭和48年までの毎年と、55年、63年に、計61の個人・団体に贈られた。

○書道講演会と古文物の展覧 1973(S49)年～1984(S59)年

昭和49年度事業として書道講演会を開き、あわせて古文物、名蹟を展覧した。
改組したばかりの連盟のあり方について、講演会を通じて周知させる目的もあったが、名古屋、大阪、札幌で開催したところ好評を博し、次年度以後も継続した。
現在は書道講演会として開催している。

海外との書道文化交流（日中国交正常化前～中国書法家協会創立まで）

1955(S30)年	11月	片山哲元首相、演出家の千田是也氏らが北京を訪問した際、中国人民対外文化協会との間で「日中文化交流に関する申し合わせ」に調印、翌1956(S31)年3月の日本中国文化交流協会発足につながる。
1956(S31)年	12月	日本中国文化交流協会から、日本書道連盟と中華人民共和国人民対外文化協会との間で書道交流に関する交渉を試みてはどうかと打診。
1957(S32)年	7月	中国側より、両国現代書作家の作品を相互に交換展示することによって交流の最初の実績にしたいと提案。
<p>〈当時は台湾国民政府と外交関係を結んでいた〉</p> <p>台湾の国民政府側から、連盟を日本書道界の代表団体と認識し、連盟と民国書道界の間で文化交流を促進したいとの申し入れがなされていた。</p> <p>台湾の国民政府のみが我が国と国交回復し、公的な外交関係を結んでいた。連盟は社団法人として文部省の監督下にある以上、この制約を無視することはできない。</p>		
1957(S32)年	9月	対中国書道交流事業の一切を移譲する機関として「日本書道文化連合会」設立。事務局は連盟と同じ日本橋室町・田口ビル内に置いた。連盟は同連合会を後援し、連盟幹部役員から準備委員を選出した。東京国立博物館・応挙館で、日本側交換作品59点の展示会開催。北京での「日本書道展」は12月下旬に開催された。
	11月	中国から作品100点が送られてきた。日本書道文化連合会は毎日新聞社と共催で、日本橋高島屋で「中国書道展」を開催、さらに大阪、福岡、名古屋はじめ、1959(S34)年にかけて全国主要都市で巡回展を開催。
1958(S33)年	5月	日中文化交流協会の斡旋、日本書道文化連合会の企画、日本書道連盟の後援により、中国人民対外文化協会の招待を受け、日本書道代表团14名（豊道春海団長）が訪中。1ヶ月にわたり香港・広州・武漢・北京・曲阜・上海・杭州・広州・香港を歴訪。

〈この後の書道文化交流 1957(S32)年～1973(S48)年改組まで〉

日中交換書道展（両国現代書作家の作品を相互に交換展示）

1957(S32)年、1960(S35)年、1962(S37)年と、3回開催。

また1972(S47)年には、毛沢東中国主席の詩詞を素材に書作品を制作し、「毛主席詩詞書展」として東京、仙台、名古屋、大阪で開催した。

日本書道代表団の訪中

1958(S33)年、1961(S36)年（西川寧団長）9名、1962(S37)年（山田正平団長）5名、

1965(S40)年（西川寧団長）6名と代表団が訪中。

一方1963(S38)年、中国から初の書道代表団（陶白団長）6名が来日、約4週間滞在した。

〈書壇統合へ —全日本書道連盟への改組—〉

1972(S47)年の日中国交正常化に伴い、「日本からの書道代表団は一本化された書壇を代表するものであることが望ましい」と中国側から希望があった。

対中国交流を「日本書道文化連合会」が進めてきたが、書壇統合への機運が高まる。

1973(S48)年	2月	中村梅吉理事長と、青山杉雨、飯島春敬、金子鷗亭、香川峰雲、村上三島の5氏会談。書壇の一本化実現のため動き始める。
	6月	第21回総会開催。書壇統合に関する決議文採択。
1973(S48)年	7/25	日本書道連盟臨時総会を、上野精養軒で開催。 日本書道連盟が主体となって統合し、「全日本書道連盟」に改組。

〈改組後1974(S48)～中国書法家協会創立1981(S56)年〉

・第5次日本書道代表団（国交正常化前の4回に続き） 1973(S48)年（中村梅吉団長）12名
友好訪中団 ・日本書道家訪中参観団 1974(S49)年、1975(S50)年、1977(S52)年の3回 ・日本書道家日中友好の翼訪中団（飯島春敬団長）133名 1976(S51)年 辻元大雲訪中 ・日本書道家友好訪中団 1978(S53)年、1979(S54)年の2回
全日本書道連盟代表団の訪中 ・日本書道家代表団（飯島春敬団長）7名訪中 1980(S55)年 中国文化部の下部組織・中国文学芸術界連合会の傘下に「中国書法家協会」設置準備中。 ①中国側窓口となる「中国書法家協会」を、1981(S56)年中に発足させる。 ②発足に当たり、全日本書道連盟が物心両面で支援する。 ③中国書法家を日本に招聘し、書道界の実情、書道教育の現状視察、書道家との接触をしてもらう。 ④相互に代表団、参観団の派遣、あるいは書道展の開催、書道関係資料の提供、研究を行う。などの取り決めがされた。
中国書法家代表団（舒同団長）6名の来日 1980(S55)年11月 中国からの代表団は、1963(S38)年以来17年ぶり2回目。
中国書法家協会発足、舒同氏が初代主席に 1981(S56)年5月

〈中国書法家協会発足後〉

代表団交流とは別に、書道関係の研究を行う「中国書道研究会」実施。団長・副団長を連盟役員が務め、団員には維持団体などから会員を派遣した。

中国書法家協会創立後すぐの1981(S56)年8月を皮切りに、2002(H14)年まで17回実施された。

1994(H6)年	第11回研究会	清水透石、副団長として訪中（団長：石橋鯉城氏） 上海～屯溪～黄山 研究テーマ「歙硯・徽墨について」
1996(H8)年	第13回研究会	清水透石、団長として訪中（秘書長：吉澤大淳氏） 北京～重慶～武漢～上海 研究テーマ「重慶博物館に収蔵される明朝の書家の作品について」
1999(H15)年	第15回研究会	清水透石、副団長として訪中（団長：新井光風氏） 北京～長春～瀋陽 研究テーマ「蘇軾・洞庭春色中山松醪二賦・ 墨跡およびその他について、萬歳通天帖鑑賞」

現在の主な活動

○書道講演会 平成16年から「書道講演会」「書写書道教育講演会」を開催

1974(S49)年	名古屋	「平安朝の仮名」	飯島春敬
		「明朝の書」	村上三島
		「書の時代性」	青山杉雨
	大阪	「書画文房のいろいろ」	梅 舒適
		「現代の日本の書」	村上三島
		「清朝の書」	青山杉雨
		「平安朝の仮名」	飯島春敬
	札幌	「平安朝の仮名書道」	飯島春敬
		「近代の詩歌」	五十嵐三郎
「現代の書道」		金子鷗亭	
熊本	「古筆について」	飯島春敬	
	「碑版・法帖について」	宇野雪村	
1975(S50)年	仙台	「現代書道の動向」	宇野雪村
		「書写書道教育について」	加藤達成
		「古筆について」	植村和堂
1976(S51)年	東京	「六朝の書道」	松井如流
		「列品解説と中国の集帖」	稲村雲洞
		「書写書道教育の内容と展望」	加藤達成
		「奈良時代の書」	飯島春敬
1977(S52)年	東京	「古筆について」	飯島春敬
		「隸書について」	松井如流
		「草書の歴史—書譜を中心として」	今井凌雪
		「日本古写経について」	加藤湘堂
	熊本	「古筆について」	飯島春敬
		「現代仮名書道について」	伊藤鳳雲
		「古代文字と篆刻について」	梅 舒適
		「明代の書道」	青山杉雨
1978(S53)年	東京	「楷書の歴史」	浅見寛洞
		「仮名の歴史」	加藤湘堂
		「幼児の文字指導」	續木湖山
	静岡	「平安朝の仮名について」	飯島春敬
		「中国書道古典の見方」	種谷扇舟
		「幼児の文字指導について」	續木湖山
1979(S54)年	新潟	「古筆について」	駒井鷲静
		「碑版法帖について」	宇野雪村
		「古代文字について」	梅 舒適
	広島	「六朝造像記について」	宇野雪村

	東京	「八〇年代に立つ書写書道教育」	加藤達成	
		「平安朝仮名の名筆」	飯島春敬	
		「淳化閣帖」	稲村洞雲	
		「平安朝仮名の見方」	飯島春敬	
		「古筆列品解説」	加藤湘堂	
1981(S56)年	東京	鼎談「最近の中国事情一書を中心として」	村岡久平 青木香流 種谷扇舟 (聞き手) 飯島太久磨	
		鼎談「書道教育について-塾の文字指導」	加藤達成 種谷扇舟 續木湖山	
		鼎談「草書について」	稲村雲洞 武士桑風 谷村憲齋 (聞き手) 泉原寿石	
		「写経について」(質疑応答による)	加藤湘堂	
		鼎談「仮名について」	飯島春敬 青木香流 平田華邑 (聞き手) 駒井鷲静	
1984(S59)年	静岡	鼎談「楷書について」	浅見寛洞 梅原清山 鈴木桐華	
		「古文物解説」	飯島太久磨 鬼頭墨峻	
		「中国の書の特質」	青木香流	
1989(H 1)年	東京	「平安朝仮名の名筆」	加藤湘堂	
		「殷周金文の製作法について」	松丸道雄	
		「鄭道昭摩崖刻石について-拓本と映画・スライドによる」	種谷扇舟	
1994(H 6)年	東京	「書写書道教育の周辺」	金子聡松	
	東京	「これからの書について」	吉田蘭処	
	沖縄	「現代中国の書と制作活動の状況」	沈 鵬	
1995(H 7)年	東京	東京	「これからの書写教育」	相澤秀夫
		東京	「型を出す」	小松茂美
		東京	「生涯学習につながる書写・書道教育」	加藤祐司
1996(H 8)年	北海道	「二十一世紀の書教育を考える」	石橋鯉城	
		「漢簡の書法」	田中東竹	
1997(H 9)年	愛知	「中国から見た日本の書」	王学仲	
		「雨森芳洲先生について」	水田紀久	
		「書写書道教育の今後の動向」	井上輝夫	

1998(H10)年	東京	「中日書道芸術の往来と学術研究について」	李 鐸
1999(H11)年	東京	「新学習指導要領とこれからの書写書道教育」	長野秀章
		「王朝古筆の美と表現」	古谷 稔
2000(H12)年	東京	「最古の手習いの発見・甲骨文字中の習刻とその手本(法刻)について」	松丸道雄
2002(H14)年	東京	「敦煌仏教美術の魅力」	東山健吾
2003(H15)年	東京	「日中の書道交流と全日本書道連盟(1951～1981)」	西嶋慎一
2004(H16)年	東京	「現代の書の展望」	田宮文平
	東京	「書写書道教育の現在の課題とこれから」	宮澤正明
2005(H17)年	東京	「生涯学習における書写書道教育」	井上孤城
		「情報社会と書」	公文俊平
		「小学校国語科書写の担うもの」	直江教子
2006(H18)年	東京	「書写教育の光と影-新しい学校教育の中で-」	小竹光夫
		「(修証一如) 行と学は一つのもの」	橋高智光
		「書写書道教育の今とこれから」 (4氏と司会によるパネルディスカッション) 静岡県伊東市 書道教育特区での小学校(書道)の指導、実地体験	石橋智子
		教員免許を持たない指導者による小学校での書写指導 最近流行の美術館でのワークショップ活動 書写書道教育の充実につき茨城県議会へ嘆願とその後	大澤梢光 笠嶋忠幸 吉澤石琥
2007(H19)年	東京	「詩と書と」	石川忠久
	東京	「楽しく学べる書写学習を目指して」	杉崎哲子
		「中学校における書写指導と試み」	山澄智英
2008(H20)年	東京	「漢字の話」	阿辻哲次
	東京	「学校における書写・書道教育は、何をめざしているのか -新学習指導要領から見えるもの-」	宮澤正明
2009(H21)年	東京	「フランス駐日大使の俳句と日本の書 -20世紀の詩人ポール・クローデルの『百扇帖』をめぐって-」	芳賀 徹
	東京	「新学習指導要領にもとづく毛筆と硬筆の指導について -おさえておきたいこと三題-」	住川英明
2010(H22)年	東京	「小・中学校現場における書写指導の実態と課題 ~新学習指導要領にもとづく毛筆と硬筆の指導について~」	荻田哲男
	東京	「日本のソフトパワー ~女手・ジャパンエキスポ・そして~」	高島肇久
2011(H23)年	東京	「新学習指導要領が目指す書写・書道教育」	加藤泰弘
	東京	「かながらの道一道に見る日本文化の牽流-」	田中恆清
2012(H24)年	東京	「新教育課程における書写・書道教育の方向性」	田中孝一
		「残された書」	島谷弘幸

2013(H25)年	東京	「小学校における書写の指導」	並木玲子
2014(H26)年	東京	「読める書をめぐって」	菅原教夫
	東京	「小学校における書写体験」	宮 絢子
2015(H27)年	東京	「学習環境としての軟筆」	細川太輔 笈理沙子
2016(H28)年	東京	「日本の書にみる日本の美意識」	名児耶明
	東京	「教育課程改訂の動向と方向性－書写・書道教育のこれから－」	加藤泰弘
2017(H29)年	東京	「中日文化交流最新情報」	陳 諍
	東京	「書写書道教育のこれまでとこれから －新しい学習指導要領の方向性－」	青山浩之
2018(H30)年	東京	「詩書画あるいは琴棋書画の精神」	加藤種男
	東京	「書写書道教育のこれから－新学習指導要領を踏まえて－」	豊口和士
2019(R1)年	東京	「語りの魅力、映画『カツベン!』公開前」	周防正行
	東京	「書の可能性～特別支援教育の視点から～」	西里俊文
2020(R2)年	誌上講演	「中華人民共和国小学校における写字書法教育 －教育法規と検定教科書を中心に－」	草津祐介

○夏期書道大学講座(実技講習会) 1975(S50)年から数え、第45回まで開催している。

(登壇者3名が担当した記録)

1997(平成9年度) 第23回	かな(大字かな)	清水透石
2003(平成15年度) 第29回	か な	清水透石
	近代詩文書	辻元大雲
2004(平成16年度) 第30回	楷 書	田中節山
2007(平成19年度) 第33回	楷 書	田中節山
2008(平成20年度) 第34回	漢字かな交じり書	辻元大雲

○書写・書道教育推進協議会への協力(構成団体のひとつ・協議会事務局として)

2014(H26)年4月1日に発足。

【構成団体】(公社)全日本書道連盟 (公財)全国書美術振興会 全日本書写書道教育研究会

全日本高等学校書道教育研究会 全国大学書写書道教育学会 全国大学書道学会

【賛同団体】(一財)毎日書道会 読売書法会 産経国際書会 (公社)日本書芸院 全日本書文化振興連盟

小・中学校の国語科書写教育ならびに高等学校の芸術科書道教育のさらなる充実を目指し、もって日本の伝統文化の普及、発展に寄与することを目的に活動を続けている。

【主な活動】

- ・2013(H25)年6月、「書写・書道教育に関する要望書」を文部科学大臣、中央教育審議会会長に提出。
- ・2015(H27)年2月、「要望書の具体的内容」を文部科学省初等中等教育局長、教育課程課長に提出。
- ・要望実現に向けたエビデンス(裏付け)を調査研究、結果を文部科学省に提出。
- ・2018(H30)年から、水書用筆等を活用した書写指導法研修会(略称:水書指導研修会)を開催。

○日本書道ユネスコ登録推進協議会への協力（構成団体のひとつ）

2015(H27)年4月4日に発足。

【構成団体】(公財)全国書美術振興会 (公社)全日本書道連盟 (公社)日本書芸院

「日本の書道文化」を国際連合教育科学文化機関(=ユネスコ)の「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表(=代表一覧表)」に記載することを目的に活動を続けている。

「日本の書道文化」が日本の代表案件になり、ユネスコに申請、登録されるためには、保護に関する国の法的担保が必要とされていた。

2021(R3)年10月15日の文化審議会答申において、「書道」は国の「登録無形文化財」に登録、同年8月26日に発足した「日本書道文化協会」を保持団体に認定することが発表された。これで国の法的担保が得られたことになり、ユネスコ登録に向けた推進運動は大きく前進したことになる。

○海外との書道交流

中国書法家協会と代表団を派遣しあう等、定期的に書道交流を続けている。

2013(H25)年に中国文化部から、同国との文化交流に貢献した外国の団体として「中国文化交流貢献奨」を受領した。同賞は中国との文化交流に貢献した外国の団体、個人に与えられるもので、中国文化部が1996年に設立した。日本では過去、平山郁夫、千宗室、池田大作の各氏と、日本出版販売株式会社、日本中国文化交流協会が受賞している。

翌2014(H26)年4月、中国大劇院での表彰式に田中節山常務理事・事務局長(当時)が出席、劉延東中国国務院副総裁から楯を受領した。

連盟は中国書法家協会の成立に貢献し、代表団の相互訪問、中国書道研究会訪中など、書道交流を続けてきた。また助けあい募金(後掲)では「中国国内での社会事業のため」とし、収益金の一部を大使館ほかへ寄託してきた。

日中代表団交流(中国書法家協会創立以後、相互に代表団を派遣)

日本からの代表団訪中	中国からの代表団来日
1980(S55)年 日本書道家代表団(飯島春敬団長)7名 北京	1980(S55)年 中国書法家代表団(舒同団長)6名 東京～京都～奈良～箱根
1981(S56)年 日本書道家代表団(飯島春敬団長)10名 北京(魯迅生誕百周年記念集会)～杭州～紹興～上海	1983(S58)年 中国書法家代表団(謝冰岩団長)4名 日中書道芸術交流展 東京展開幕式
1983(S58)年 全日本書道連盟代表団(梅舒適団長)8名 北京(日中書道芸術交流展開幕式)	1984(S59)年 中国書法家代表団(舒同団長)6名 東京～鎌倉～日光～名古屋
1984(S59)年 日本書道会代表団(梅舒適団長)8名 北京～太原～大同	1986(S61)年 中国書法家代表団(陸石団長)6名 東京～奈良

1987(S62)年 全日本書道連盟代表団(浅見寛洞団長)6名 北京～大連～瀋陽	1988(S63)年 中国書法家代表団(黄綺団長)6名 東京(日中代表書法家展開幕式)～箱根～京都
1989(H元)年 全日本書道連盟代表団(田中凍雲団長)5名 北京～廈門～福州～上海	1990(H2)年 中国書法家協会代表団(邵宇団長)5名 視察テーマ「学校教育における書道」(教育現場 視察や意見交換) 東京～奈良
1991(H3)年 全日本書道連盟代表団(田中凍雲団長)12名 北京～保定～石家荘	1992(H4)年 中国書法家協会代表団(劉藝団長)6名 福岡～熊本～大三島～京都～東京(日中代表書法 家展開幕式)
1993(H5)年 全日本書道連盟代表団(金子聴松団長)5名 北京(北京国際書法交流大展開幕式)	1994(H6)年 中国書法家協会代表団(沈鵬団長)5名 沖縄(沈鵬団長講演)～東京
1995(H7)年 全日本書道連盟代表団(尾崎邑鵬団長)4名 北京～重慶～三峡下り～武漢	1996(H8)年 中国書法家協会代表団(王学仲団長)5名 北海道(王学仲団長講演)～東京
1997(H9)年 全日本書道連盟代表団(金子聴松団長)4名 北京～敦煌～蘭州～西安	1998(H10)年 中国書法家協会代表団(李鐸団長)5名 東京(李鐸団長講演)～宮城
1999(H11)年 全日本書道連盟代表団(稲村雲洞団長)4名 広州～昆明～麗江～上海	2000(H12)年 中国書法家協会代表団(沈鵬団長)6名 東京(日中代表書法家展開幕式)～伊豆～宮崎
2001(H13)年 全日本書道連盟代表団(新井光風団長)5名 北京(中国書法家協会創立20周年記念展開幕式) ～承德	2003(H15)年 中国書法家協会代表団(張海団長)5名 東京～京都～奈良
2006(H18)年 全日本書道連盟代表団(井茂圭洞団長)5名 北京～雲南～上海 清水透石副団長 訪中	2007(H19)年 中国書法家協会代表団(趙長青団長)5名 仙台～東京～箱根～千葉
2010(H22)年 全日本書道連盟代表団(樽本樹邨団長)6名 北京～瀋陽	2012(H24)年 中国書法家協会代表団(何奇耶徒団長)5名 東京(日中代表書法家展開幕式)～京都
2013(H25)年 全日本書道連盟代表団(清水透石団長)7名 上海～南京～北京 清水透石団長 田中節山副団長 訪中	2015(H27)年 中国書法家協会代表団(張海団長)6名 東京(日中書道交流会開催)
2018(H30)年 全日本書道連盟代表団(辻元大雲団長)4名 北京～瀋陽 辻元大雲団長 訪中	

○助けあい募金（社会事業協力） 令和元年度 日本赤十字社・駐日中国大使館へ 計 340 万円

日本書道連盟時代の1956(S31)年、書道界では初めての試みとなる「歳末社会奉仕の作品頒布会」実施。連盟顧問・役員の手切り作品 265 点を頒布し、収益金から必要経費を差し引いた額を毎日新聞社と朝日新聞社へ寄託、また北海道冷害救済に充てた。

翌年からは「歳末助けあい運動作品頒布会」として S32, 33 年、S36 年から 1972(S47)年まで継続して実施され、各社会事業団体に寄託した。

改組後の 1975(S50)年から要項を改めて再開、当初は毎日新聞社が後援し、頒布作品は色紙大または色紙とした。

2001(H13)年からは 1 口 1 万円の募金をいただく形とした。これは作品頒布に係る経費を削減し、寄付金を少しでも多く寄託するため。

S50 年以後、収益金は毎日社会事業団、大地震など災害があった年にイタリア大使館やソ連大使館、日本ユニセフ協会、中国残留孤児援護基金、交通遺児育英会、中国紅十字会などに寄託してきた。

1990(H2)年以後は日本赤十字社を主な寄託先とし、ほかに中国紅十字会、中国大使館などへ寄託している。

1975(S50)年からの、寄託金累計は 158,630,120 円にのぼる。

これまでに日本赤十字社からは「厚生労働大臣感謝状」「社長感謝状」を受けている。

○地域の書道団体が主催する講演会、講習会等への助成金交付

都道府県、市区町村を規模とする書道団体が主催する講演会、講習会等の事業運営に対して経済的助成を行うことにより、全国書道団体の活性化、書写書道教育の充実発展に協力している。

2009(H21)年から実施し、これまで 52 件の事業に対し助成を行った。

○書道展の後援（後援名義・賞状交付とも無料） 令和元年度 174 件 令和 2 年度 122 件

連盟会員が主催に関わる展覧会、講演会、講習会などに対し、後援名義を無料で利用いただいている。

○文芸美術国民健康保険組合の取り扱い（文芸美術に従事する方に国保の斡旋）

1956(S31)年 1 月、文芸美術国民健康保険組合に加盟した。

同国保組合は 1953(S28)年、日本文芸家協会、日本美術家連盟、日本作家組合、全日本工芸美術家協会、出版美術家連盟の 5 団体が特別国民健康保険組合設立に動き、発足したものの。

当書道連盟は 27 番目の加盟となった。現在は 67 団体が加盟している。

当連盟が行う事業として「書道家の福利厚生」が定款に定められており、書家に専従する（書家以外の業を持たない）連盟会員の方に加入斡旋を行っている。